

飯島一敏も『大變恐縮ですが…一言コラム』

第66回 飯島一敏 投稿コラム ~無礼講はあり？なし？~

中国の古来の話。春秋時代の中期、斉という国に名宰相、晏嬰^{あんえい}という男がいた。景公という君主につかえた男であったが、司馬遷の名著『史記』の中に紹介されている男である。今でも『晏氏の御』『橘化して枳となる』など日本でもことわざとして残っているが、自分の信念を持ち、何でも君主である景公に対し直言した人物で、その中に無礼講についての話がある。今回はそれを紹介したい。

景公はしばしば酒宴を開いて楽しんだ。景公はもともと堅苦しいことが嫌だった人物のようで、ある日の酒宴の中で「礼はいらぬ」と言った。さしずめ無礼講ということである。家臣たちは大いに喜び宴席が喜笑で沸いた。ところが晏嬰だけは容を崩さず、景公に向かい「君の言はまちがっておられる」と直言した。この一言で満場の喜笑は一気に静まり返った。晏嬰は直言を続け、「**理性が本能より勝るのは礼があるからです、礼を棄て去れば、禽獣と変わりありません**」当然のごとく宴席はしらけた。景公はむっとして立ち上がり宴席を去ろうとした。他の家臣たちは容をあらためて景公を見送ろうとしているのに、晏嬰だけが横を向いていた。「無礼な」景公の胸中は怒りで震えた。「なんたる男ぞ」とわめき散らしてかえっていった景公はいきなりくるりと振り返り「宴席にもどる」と言い放った。側近たちはあたふたした。「晏嬰めがどんな顔で酒を飲んでいるのか見てやる」飛ぶように宴席に戻って晏嬰をみおろした。他の家臣たちは景公に対し礼を行ったのに対し、晏嬰だけは座ってただ酒を飲んでいて。景公は怒りを目にとめたまま「そんなに酒が好きなら差しで呑もう」といい盃をつきだした。こういう場合君主の方が先に呑むのが礼であるのに、晏嬰は先に呑んだ。「無礼者！」景公は盃を投げ捨てて怒りを爆発させた。「卿はさきに無礼はならぬと申したではないか。それが礼か」と責めた。この言葉がやむと晏嬰はさらりと席を降り、再拝稽首して「私が自分で言ったことをどうして忘れましょう。それゆえ、私は無礼講というものがどういうものかお示ししたのです。もし無礼講をお許しになれば、家臣はことごとくこうなりましょう。」 宮城谷昌光著『晏子』より

これから年末年始に入っていく、忘年会や新年会などお酒を伴う席がたくさん増えてくるでしょう。皆さんは大丈夫ですか？お酒の席では『無礼講』であると思われがちですが、もう一度よく考えて見ましょう。お酒の上だからはい言訳にはなりませんよ。お酒を呑まれる皆さん、酔っても礼は忘れずに。

以上、飯島一敏からの余計なおせっかいでした。